

#書評



本書が全医師にとって 必読である理由

評者 志水太郎

獨協大主任教授・総合診療医学

本書に出会ったのは約20年前、医学ですぐのことでした。大学生協で立ち読関連の本の横に並んでおり、感染症の手に取ったのです。医学部低学年でも、衝撃を受けたのは、今もその原型をとど

まの姿を残したままの「感染症診療の基本原則」でした。頁をめくると臨床のリアルがそこに展開され、興奮しました。学年が進むにつれ、初版「序」の記述を地で行くように「無数の感染症治療薬に窒息しかかっていた」自分に、先に進む光を与えてくれた感動を昨日のように思い出します。初期研修医時代には、本書の「名所」の1つである感染症フローチャート(本書p.7)に倣い、紙製の温度版にこれでもかというほどびっしり重要な情報を書き込み、温度版を見ただけですべてが一目瞭然にわかるように整理しました。青木先生が「内科は整理の学問だ」とおっしゃるとおり、この温度版の習慣が症例を頭の中で俯瞰して整理する能力を鍛えてくれたと感じています。

『ハリソン内科学』と同様に、「総論」部分が本書の価値の中核を成しています。本書は1,700頁超の大著ですが、頁数に圧倒されたり積読になる心配はありません。時間がなければ各論は必要時に参照するとして、購入日のうちにでも確実にお読みいただきたい第1章は、わずか38頁です。しかし、濃密な38頁でもあります。すべてのページが重要ですが、「重症度を理解する」「各論的に考えよう」(p.2)、「やるとなったら治療は徹底的に」(p.4)、「回復のペース、パターンを予測する」(p.5)、「経時的な変化を追う」(p.6)、「基礎疾患と起病因菌」(p.13)、「グラム染色に対しての否定的な意見」(p.19)、「治療効果は何と何で判定するか?」(p.35)、「細菌感染症は悪化が改善あるのみ」(p.37)などは、遅くとも初期研修修了までに体感として骨の髄まで染み込ませる必要があると思います。現場に出て発熱患者に途方に暮れないために、次に読み込み制覇すべき章は、第6章「A 不明熱」(pp.441-459)の19頁です。ここまでの領域が頭の中でクリアに整理されていれば、少なくともベッドサイドでコモンな感染症や熱・不明熱のケースに対峙する準備は整ったと言えると思います。

本書が第4版を迎えても「マニュアル」という名前を変えない理由は何でしょうか? それは、指針は示すが盲従するな、原則に則ったうえで個別に考えよ、というメッセージと想像します。「青木マニュアルにこう書かれているから、こうすべき」ではなく、「青木マニュアルにはこう書かれている。そのうえで、この患者さんには〇〇という条件もあるから、今回は△△の根拠と理由でこうすべきだと思う」というのが、本書が期待する臨床医の姿勢だと思います。仮に、そのうえでベストな方針を採用しても、さまざまな状況性のもと難しい臨床経過をたどることもあります。そんな時に活きるのが「総論」で強調された原則に基づいた、解剖・生理・生化学といった「biomedical」の力、加えて「psychological」「social medicine」を多面的に考慮しゼロベースで考える総合的な思考力や応用力だと思います。

「師匠は優れた弟子の数で偉大さがわかる」というのは、本書に推薦の言葉を寄せたLawrence M. Tierney Jr. 先生の数あるパールの1つです。青木先生単著の初版から幾星霜、そのファンであったことが想像にたかなく弟子・盟友の先生方が今度は著者となり、本書をさらに充実させています。共著者が多数になっても単著のように論調が一貫しているのは、執筆のプリンシプルやロジックが著者陣に十分に共有されているからだと思います。この事実自体が、青木先生が日本の医療界に与えたインパクトと歴史を証明していると感じます。初版にしてすでにベストセラーだった本書に、前版から共著者を入れられたことには、「教育者」である青木先生の懐の深さも感じます。第2版の改訂時には文字どおり「命を削って」この本を書かれていた先生の姿を身近で知る弟子の1人として、このような「継承」によって改訂を重ねられていることは嬉しく、また安心も感じています。

最後に、ご提案として本書評をご覧の先生にお願いがあります。秘書さんなどにお伝えいただき、本書評を医局のよく目につくところに掲示していただきたいのです。本書評を読む機会のない先生方にも、本書をぜひお読みいただきたいからです。臨床医である以上、感染症を診察しない医師はいないと思います。感染症を診る「奥義」ともいえるべき基本の考え方や共通言語が明示されている本書の総論部分と不明熱の章は、すべての医師にお読みいただきたいほうがよいと思います。さらに、臓器別診療科の先生方は追加で担当臓器の章を、総合診療医や救急・集中治療の先生方はすべての章をお読みいただくとよいと思います。つまり、すべてのベッドサイドの医師にとって本書は必読の1冊だと思います。新型コロナウイルス感染症の流行で、感染症に対する思考停止の常態化が改めて示唆されました。本書を通じて、その連鎖を断ち切り、日本の感染症診療のレベルを向上させるのは、今が絶好のタイミングだと思います。

G



レジデントのための 感染症診療マニュアル 第4版

青木 眞=著

定価: 本体 12,000 円 + 税
A5・1,730 頁/医学書院/2020
[ISBN978-4-260-03930-7]

部2年生の時で、偶然、初版が発行されみしていたUSMLE(米国医師免許試験)別講義があった直後だったこともあって「すごい本」というのはわかるものです。めつつデザインが洗練された第1章の「感